立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０１５年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　　キリスト教学　研究科　　キリスト教学　専攻		
研究代表者（2016年3月現在のものを記入）	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	キリスト教学研究科キリスト教学専攻博士課程後期課程１年	川瀬麻衣　　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	キリスト教学研究科　特任教授	大島　博　　印	
自然・人文・社会の別	~~自然~~　・　人文　・　~~社会~~	**個人・共同の別**	個人　・　~~共同　　名~~
研究課題	戦時下における賛美歌の研究――「興亜讃美歌」への賛美歌学的アプローチを中心に		
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	立教大学　キリスト教学研究科　キリスト教学専攻　博士後期課程１年	川瀬麻衣	
研究期間	２０１５　　年度		
研究経費（1円単位）	（支出金額）185,593円／（採択金額）200,000円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は賛美歌史に関する研究である。本研究においては、太平洋戦争中の1943年に刊行された『興亜讃美歌』（日本基督教団讃美歌委員会　刊）を主たる研究対象とし、賛美歌学の手法によってその特徴を明らかにする。さらに、同賛美歌集の刊行に至る経緯を書誌学的調査によって明らかにし、また同賛美歌集に使用の実態並びに戦時下における礼拝・賛美の実態を調査する。さらに、それらを解釈するための背景に関する研究として、当時の社会とキリスト教会の関係に関する調査も行う。また、時代背景に対する調査として、同時期の他の共通賛美歌に対する分析も行う。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔讃美歌　　〕〔礼拝　　〕〔太平洋戦争　　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

●アンケートによる戦時中の教会週報の所在調査について
太平洋戦争中に、日本の教会で行われていた礼拝において、本研究の主たる研究対象である『興亜讃美歌』（日本基督教団讃美歌委員会　1943 年刊）が用いられていたか否か、また用いられていたとするならどのような機会に用いられていたのかを調査する第一段階として、本調査を行った。本調査によって戦時中の週報を所蔵していると回答した教会に交渉して、週報の実物を閲覧し、礼拝で用いられた讃美歌を調査するものである。

調査対象の教会は、以下の条件によって選定した。
・東京都内（島嶼部を除く）に所在する日本基督教団の教会
・設立が 1945 年 8 月 15 日以前の教会
これらの条件に基づき、選定された教会は 120 あるが、先立って調査を行った 2 教会を除き、118 教会に以下の内容のアンケートを送付した。
・教会の名称、住所、設立年、代表教役者などの基本データの確認
・戦時中の週報について所在の有無と所在の場合の分量ならびに閲覧の可否
・戦時中の各種教会記録について所在の有無と分量ならびに閲覧の可否
・閲覧を希望する場合の窓口となる教会担当者
返送方法は切手貼付の返信用封筒を同封し、他に FAX での回答ならびに e-mail による回答とした。
また、2016 年 3 月の段階で回収状況が芳しくなかった為、未回答の教会に対して回答を促す葉書を送付した。

これに対し、対象教会からの回答状況は以下の通りである。
・返信用封筒を用いた回答…35 教会
・FAX により回答…4 教会
・e-mail により回答…14 教会
・電話により回答…1 教会
・合計…54 教会
アンケート回収率は約 46%と芳しいものではなかったが、これについては以下の二点を原因と推察した。
・戦時中の礼拝というデリケートな側面を強くもつ事項に関する調査であること
・週報を保管していない教会において、「保管していない」という情報はどうせ役に立たないだろうと考えて回答に到らなかった

また、回答を寄せた教会の回答内容は以下の通りである。
・週報、教会記録ともに所在無し…41 教会
・週報の所在あり…10 教会
・教会記録の所在あり…2 教会
・無記入…1 教会
これらのうち、「週報の所在あり」と回答した教会は、1 教会を除いて閲覧を許可する旨の回答であり、順次訪問しての閲覧調査を執行中である。

今回のアンケート調査においては、「所蔵なし」との回答の教会であっても、他に調査の参考となりそうな情報を寄せる教会がいくつかあった。この場を借りて有益な情報提供の厚情に感謝の意を表したい。

研究成果の概要　つづき

●太平洋戦争中ならびにその前後の共通讃美歌の研究
『興亜讃美歌』の研究を進めるにあたり、太平洋戦争中における同讃美歌の位置付けを明確にするため、太平洋戦争前後に刊行された共通讃美歌（教派を超えて用いる目的をもって編集された讃美歌集）の比較研究を行った。具体的には、日本基督教団讃美歌委員会とその前身の讃美歌委員会が『讃美歌』(1931 年版）と『讃美歌』（1954 年版）の間に刊行した讃美歌集を対象としたが、これらはいわば 1931 年版のバリエーションというべき讃美歌集である。
比較分析の対象とした讃美歌集の概略は以下の通りである。なお、書名に下線を付したものが本資金によって購入した讃美歌集である。

・『讃美歌（1931)』
戦前最後の一般の用に供するための共通讃美歌。全収載曲数 639 曲。
・『青年讃美歌（1941)』
太平洋戦争開戦前の 1941 年（昭和 16 年）4 月発行。1931 年版からの抜粋 104 曲と日本人の作詞作曲による新曲 53 曲を収載。
・『讃美歌時局版（1942)』
戦時の物資不足に対応するため、1931 年版の曲数を半減させ、版型を B7 判 と小型化したもの。1931 年版からの抜粋 232 曲と『青年讃美歌』の邦人新曲より 39 曲を収載。
・『讃美歌抄（1947)』
戦後発行された小型版。1931 年版から抜粋した 158 曲を収載。
・『讃美歌　（1949、1931 年版一部改訂版)』
戦後に高まる讃美歌集への需要に応えるべく 1931 年版を一部改訂して出版。1931 年版の改訂版という位置付けのため収載曲数は 1931 年版と同じ 639 曲であるが、時局にそぐわない一部の歌詞に変更が見られる。
・『讃美歌（1954)』
1949 年から 5 年の編集期間を経て発行されたものであり、戦後の脱軍国主義の動きに沿い、徹底的な見直しが行われた。

これらの讃美歌集の収載讃美歌各局の分類、作詞者、作曲者、調、拍子などを巨視的視点より集計し、讃美歌の抜粋採用状況について比較分析を行ったところ、以下の二点の特徴が導出された。

・福音唱歌に由来する「雑」分類の讃美歌は、親しみやすくて平明という特徴があるものの、戦時中においては特に『青年讃美歌』において低い採用状況であった。しかし、戦後発行された『讃美歌抄』においては多く採用された。これは、戦後急増したキリスト教徒に親しみやすい讃美歌を配した結果であると考えられるが、戦中と戦後において求められた讃美歌像の変化を如実に表しているものである。
・日本人の手による讃美歌は、戦中の讃美歌集においては多く採用されたが、それでも 1931 年版に掲載された邦人讃美歌がすべて採用されたわけではなかった。一方、その 36 曲全てが日本人の作詞作曲になる『興亜讃美歌』収載の讃美歌は同讃美歌集以外には採用されていない。これは同讃美歌集が戦時下においても異質と認識されるほどに特異な讃美歌集であったことを表している。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①
川瀬麻衣「太平洋戦争中ならびにその前後の共通讃美歌集概観—『讃美歌　1931 年版』と『讃美歌　1954 年版』の間を埋める讃美歌集について」『立教大学教会音楽研究所報 RICM MUSICA SACRA』第 5 号、立教大学教会音楽研究所、2016 年

②
なし

③
なし

④
「月刊『讃美』紙に見る戦前・戦中の教会音楽事情」川瀬麻衣、キリスト教礼拝音楽学会第 16 回大会（2016 年 5 月 28 日予定）